英一蜂『画本図編』の周辺――五味以則、青木桃渓、曾我蕭白

馬　渕　美　帆

はじめに

宝暦二年（一七五二）正月刊の『画本図編』は、江戸の画家・英一蝶の画を弟子の英一蜂（一六九一―一七六〇）が模写し出版した一蝶画集である。[1]その寛延四（宝暦元）年五月の序文の筆者について、執筆者は先稿で、江戸の儒医・五味以則であることを指摘した。以則は当時の江戸の俳諧文化において重要な人物であるが、名利を好まず隠遁生活をしていたという人柄の故もあって、現在ではほぼ忘れられている。以則について知ることは、一蜂の人脈を考える上でも欠かせない。本稿では、まず、多くが知られていない以則の行状について、一蜂との関わりを含めて確認する。

その上で、江戸で以則から親しく俳文の指導を受けていた伊勢久居藩士の俳人・青木桃渓に注目する。桃渓は、長年参勤交代で久居と江戸を行き来しつつ、俳諧活動をしていた。執筆者は以前、別の先稿で、[2]京都の画家・曾我蕭白（一七三〇―八一）が伊勢地方の障壁画などにおいて『画本図編』を利用した作画をしていたことを指摘したが、桃渓の活動を詳しく見ると、彼が伊勢において『画本図編』の普及に関わっていた可能性が新たに見出せるのである。本稿では、桃渓の活動の確認からこのことを指摘し、蕭白の伊勢における『画本図編』利用の背景を再考する。

一　五味以則について――『画本図編』序文筆者

五味以則（一七〇七―六〇）については知られる所が多くなく、『関東俳諧叢書』第二十六巻所収の『鶴の屋どり』の解題と、[3]雲英末雄編『江戸書物の世界――雲英文庫を中心にたどる』所収の『李撰文選』・『続李撰文選』の解説[4]にまとめられている。前者では、明和九年（一七七二）八月嵐山序・安永四年（一七七五）秋 来之跋の嵐山編『猿利口』に載る五味以則の情報が紹介されるが、彼についてはこの『猿利口』と『李撰文選』『続李撰文選』から得られる情報に加え、いくつかの俳書にその活動が見られるのがすべてである。以則についての基本事項として、やや煩雑となるがここで確認しておきたい。まず、『李撰文選』『続李撰文選』及び『猿利口』から得られる情報について述べる。

宝暦十二年（一七六二）正月刊の甘六味・青木桃渓・交桜編著『李撰文選』全四巻[5]は、実質的に五味以則の代表作である。『日本古典文学大辞典』には「六味・桃渓・交桜の江戸の三子が桃渓の有李堂に会し、六

味の指導で作文に遊んだ六年間の草稿を、交桜が桃渓に諮って撰び、撰場の名に因んで題した俳文集。」とある。[6] 巻一の初めに六味・交桜・桃渓三人の序文があるが、その最初の「甘六味」が五味以則の俳号である（以下、本稿では「五味以則」と「六味」の表記を共に用いる）。桃渓の序文は宝暦十一年八月のものである。序文の後に目録があり、その後に桃渓・交桜連名の「記事」がある。巻四の終わりに皐月平砂による宝暦十一年九月の跋文がある。三つの序文と「記事」・跋文、特に「記事」から同書の成り立ちが知られる。それらによると、桃渓と交桜は宝暦四年頃から六味に学んで作文し、同八年から三人で密かに文章の刊行を計画していたが、六味は病気が悪化して宝暦十年春に歿してしまった。六味の遺志を継いで桃渓と交桜が刊行しようとした所、六味の子である四明が「翁ハ生涯名利ヲイトヒテ隠逸ヲムネトシケル」との理由で反対したが、約束なので刊行する、という。また、本文の端々から、桃渓と交桜は伊勢久居藩士であり、参勤交代での江戸滞在中に六味に俳文を学んでいたこと、六味はもと儒医で、かつて待乳山の麓の竹門に住んでいたこと、五十歳の時即ち宝暦六年に川越の三芳野に出立したこと（滞在期間は不明。なお、同年桃渓は五十五歳で五歳年長）などが知られる。桃渓については次章で詳しく述べる。『李撰文選』は巻四の奥付に京都・大坂・江戸（三軒）の書肆名があり、三都で販売されたことが知られる。奥付では最後の岩井屋理兵衛に「梓」とあるが、江戸の出版許可記録『割印帳』では、宝暦十一年九月二十五日に、奥付で江戸の書肆の最初に名がある辻村五兵衛を「板元売出」として許可されている。[7]

また、六味・交桜・桃渓編著『続李撰文選』全四巻は未刊の版下用稿[8]本で、巻一の初めに桃渓・交桜二人の序文があるが、年記はない。二つの序文から、同書は『李撰文選』の続編として、六味を含めた三人の俳文を桃渓・交桜が撰んで編んだことがわかる。本文からは、六味が三芳野に招かれて行き、一年の半ばは「柳塘」、半ばは三芳野で過ごしていたので二遊の翁と呼ばれていたこと、多病につき東海道（以西）への旅はしたことがないことなどがわかる。特に巻四の「十　六味翁誄　桃渓」からは、六味が宝暦十年一月二十二日に歿したこと（歿年五十四歳）、医者の家に生まれたが市中に隠棲し、柳原（他の文章で「柳塘」と表現される。万世橋から浅草橋にかけての神田川南岸）の辺りに住んでいたこと、宝暦九年秋から三芳野に遊んでいたことなどが新たに知られる。また、巻四の「十一　甘翁誄　交桜」からは、六味は柳原・川越の両方に子や孫がいて世話をしてもらっていたことも知られる。このように六味を追悼する文章や、桃渓六十歳の宝暦十一年春の祝いの文章など六味歿後のものも含まれているが、先の『李撰文選』の奥付に「続李撰文選　近刻」とあることから、収録される文章はいずれも宝暦十二年をそれ程下らないものと考えておきたい。未刊であるのは、『李撰文選』の刊行が四明の反対にあったことと関係するのだろうか。『続李撰文選』には他にも重要な内容が含まれているが、それについては第三章で述べる。

次に、『猿利口』から得られる情報について確認する。『蕪村全集』第八巻所収の『猿利口』の解題[9]によると、同書は、江戸から上洛した和田竹護（嵐山）が明和九（安永元）年までに編集していたが、翌年に歿して未刊となっていたのを、彼の三回忌に合わせて来之らが刊行したと考えられる。竹護は、長水（後の柳居。佐久間氏。一六八六―一七四八）、さらに蓮之（後の珪琳。松木氏。一六八四―一七四二）についていたが、二師の歿後は谷口楼川（一六九九―一七八二）門に入り、明和七年に上洛して与謝蕪村一派の句会に熱心に参加した俳人である。[10] 安永元年

に嵐山と改号した。[11] なお、楼川は以則とも関わりが深い俳人なのでここで見ておくと、稲津祇空門で、後に珪琳に師事した。延享二年（一七四五）、『江戸廿歌仙』に参加した。以後、馬場存義に従う。妻の田女、養子の鶏口と柳原土手下に住んだ。[12]

『猿利口』の嵐山の自序に、同書は、彼が享保初め頃からの約五十年間に交流した俳人達から聞いた句を記したものだとある。同書の「東武古人」の項に、「瓜の蔓に茄子（なすび）の生（なり）し野分哉　以則／五味以則と云儒医也。多病にして、東武所〳〵にひそみ、詩文章をたのしみ、将（はた）ばせを・支考が俳文をしたひ、尤（もっとも）たくみにして、和文章東武に多し。ほ句は長ぜざるにや、多聞（おほくきか）ず。」とある。[13] 同書で他に俳人の説明が加えられている例を見ると、大半は嵐山自身との関わりが記されているが、ここにはない。嵐山の自序には、収録句について、疎遠な人の句は少数しか覚えていない旨が述べられており、以則についての説明も『李撰文選』などを元にしたと見られなくもないが、俳号の「六味」ではなく「以則」と記してあえて詳しく説明していること、以則には発句がそもそも少ないとあることから、一句ではあるが以則と一定の親交があった可能性も否定できない。『猿利口』は上京後の編集であるため、嵐山が、以則は江戸では著名だが上方では馴染みの薄い人物であると慮って、その重要性を知らしめるべく解説を加えたかと思われる。

ともかく、ここで示されるのは次のようなことである。以則は儒医であり、病弱で江戸のあちこちに隠棲しながら漢詩漢文を楽しんだ。また、松尾芭蕉や各務支考のような俳文に優れ、江戸に多く遺っている。発句は得意でなかったのかあまり聞かない。この情報は、既述した『李撰文選』・『続李撰文選』や、次に見る俳書から窺える彼の活動とも合致するものである。

次に、俳書に見られる六味の活動について、『関東俳諧叢書』によりながら確認しておく（以下、『関東俳諧叢書』で当該事項が指摘・掲載される巻数と頁番号を「関〇〇、〇頁」と表記する）。

まず、寛保元年（一七四一）九月刊の富岡有佐・平砂編『其砧』（桑岡貞佐七回忌追善集）下巻の「後序」を手掛けており（関二十、一一〇頁）、その末尾に「寛保辛酉之秋九月／葛飾之傍邨舟堀之住／六味翁誌」とある。[14] この頃は葛飾の近くに暮らしていたことがわかる。当時六味は三十五歳だが、既に「翁」と名乗っている。[15] また、寛保三年十月刊の訥子（初代沢村宗十郎）編『置土産』（関二、一四七頁～所収）は、訥子が江戸から大坂に戻った際の送別句集で、江戸の主な俳人が名を連ねるが、ここに訥子と六味による和漢句の首尾吟が収められている。六味による「和漢首尾序」の後に、「和漢首尾章」として、訥子が和文の句を、六味が漢文の句を順に詠み合っている（関二、一七八～一八〇頁）。一句ずつが収載される他の俳人達とは異なる、六味の立場が窺える。また、延享二年（一七四五）刊の右江渭北編『むかし道』に跋を寄せている（関二十、一一七頁）。[16] この後の宝暦二年（一七五二）正月刊の英一蜂『画本図編』に「序」（寛延四（宝暦元）年五月）を寄せることになる。

宝暦四年冬跋の仙里編『鄙の綾』（関二十六、一九頁～所収。なお、編者は関三十二、一二三頁で仙里に訂正されている）は、坂戸の仙里が、師楼川の子・鶏口の来遊を記念した集だが、ここに一句を寄せている（関二十六、二二頁）。同書には一蜂が、仙里の句に舞踊図、仙花の句に鹿図の挿絵を描いている。また、宝暦六年春刊の春来（二世青峨。前田氏）編『東風流』には、巻三の祇空の句による脇起し歌仙で楼川の次に「烏共笑烏瓜」の漢句が載り、異彩を放っている（関二十六、一〇

八頁）[17]。なお、同書巻三には一蝶の句による脇起し歌仙、巻四には一蜂の句による脇起し歌仙も収録されている。また、宝暦七年十月刊の秀谷（後の秀国。寿氏）編『俳諧拾遺清水記』（関十、七五頁～所収）の「序」を手掛けており、その末尾に「六味翁秋の中端よりみよしの丶里にあそへるを雁のよすかをしてせちに序をもとむ其ものまめやかなるに感して寓窓に筆をそめ侍りぬ／六味／丁丑之冬」とある。[18]六味が短くとも同年八～十月の間、三芳野に滞在していたことがわかる。同書には一蜂が「舟繋松」の挿絵を描いている。また、宝暦八年九月刊の楼川編『八百里紀行』に句を寄せている（関二十六、一〇八頁）[19]。また、宝暦九年三月跋の仙桂編『鶴の屋どり』（関二十六、一〇七頁～所収）は、三芳野の仙桂が、昨冬、庭に鶴が営巣したのを賀して企画したもので、師楼川の「序」と、楼川が贈ったという一蜂の鶴図の口絵が載る。同書巻頭に、六味や仙桂らによる首尾吟が載るが、前書を伴う六味の句で始まり、その前書から、六味が仙桂宅を遊鶴巣と名付けたことが知られる。また、巻末には五味貞於（春桂）による漢詩「遊鶴巣寿歌」が跋代わりに載る。『関東俳諧叢書』の同書解題に、五味貞於は医師で詩をよくし、縁戚かもしれないとあるが、春桂と号することから仙桂と近い所で俳諧活動などもしていた可能性がある。あるいは、六味は三芳野方面にいた貞於を頼って同地に滞在していたのかもしれない。

以上から以則の活動についてまとめると、以則は、平砂など江戸座の俳人達と交流しながら俳諧活動をしていたが、句そのものよりも、俳書の序文や跋文を依頼されることが多い。句は漢句が目立つ。また、楼川や特に川越近辺の楼仙門との関わりが深い。楼仙は柳原土手下に住んでおり、以則と近隣だったので親交が発生したと考えられる。また、以則は遅くとも宝暦六年からは毎年三芳野に滞在していたと見られるので、川越近辺の楼仙門俳人との交流はそのためだろう。楼川門の嵐山による以則についての記述を見るに、俳諧において楼川門というわけではなさそうだが、そうした形とはやや異なる儒者の立場で俳諧活動に関わり、俳人達から一目置かれていた人物だったと想定される。次章で詳しく見る桃渓との交流もそうであるが、以則と俳人達との主要な交渉は、たまたま近隣に住んでいたといった地理的な要因に基づくものであり、まさに市隠と呼ぶにふさわしい以則の人物像が窺える。

一蜂との関わりを見ると、『画本図編』より後では、以則の句や序文が載る俳書に一蜂が挿絵を寄せている例も多く、共通の俳人達と交流し、近い所で活動していたことがわかる。これには、『画本図編』の編集が大きなきっかけとなった可能性が高い。『画本図編』より前には、以則と一蜂は、片や（病弱もあって）隠遁生活の儒医、片や英派の人気絵師というそれぞれの立場で江戸の俳人社会に関わっており、互いの活動をよく知る間柄だったと考えられる。もちろん、『画本図編』の序文を依頼する程なので一定の面識はあっただろう。同書の序文が書かれた時点で一蜂は六十一歳の大ベテラン、以則は四十五歳だが「翁」と名乗って久しく、落ち着いた風格だったと想像される。執筆者は先稿[20]で、『画本図編』が板元を同じくする大岡春卜『和漢名画苑』の体裁をモデルに制作されたことを指摘したが、『和漢名画苑』に倣って儒者に漢文の序を書いてもらうことを企図した時に、当時、俳書での活動などで、江戸の俳人社会で目立った存在だった以則に依頼することが自然に浮かんだのだろう。『画本図編』では、以則の江戸における上記のような儒者兼俳人としての立場を踏まえて序文を依頼したものと思われる。

二　青木桃渓について――五味以則との親交

次に、以則から親しく俳文指導を受けた伊勢久居藩士の青木桃渓（一七〇二―七九）について述べる。なお、久居藩は津藩から分かれて成立した支藩で、いずれも藤堂家を藩主とする。桃渓については、岡本勝氏の論考があり、[21]そこにも引かれる『続三重先賢伝』[22]の記事が基本資料と見なされている。それによれば、伊勢高野尾の人で、父は久居藩藤堂高賢（執筆者註：二代藩主高堅）に仕えて勘定方となり、長男の桃渓は徒士書役勘定役を経て総締となり出世した。賢く諸芸に通じて中でも俳諧で有名となり、来訪者も多かった。安永八年（一七七九）八月七日に七十八歳で歿した、という。総締（惣〆）は、久居藩において城代家老の下にくる役職の一つで、吟味役・加判・勘定を取りまとめる要職である。[23]また岡本氏は、桃渓と津の藩士俳人・茨木素因、また久居藩士で芭蕉の弟子・向日卜宅との交流や、桃渓が久居に木槿塚を建立したことを指摘されている。卜宅は延享五年（一七四八）に九十二歳で歿したが、桃渓は二十八年にわたり親しく交わったとしている（『李撰文選』巻四「五　卜宅誄　桃渓」）ので、桃渓が十代末から卜宅などの下で俳諧を行っていたことが窺える。

俳書に見られる桃渓の活動について、『関東俳諧叢書』によって確認すると、柳居門であると判断され、主に柳居系の俳書に載る。桃渓が柳居門であることも従来明確な指摘がないため、確認した例を以下に列挙しておく。

まず、元文五年（一七四〇）末刊の宋阿（早野巴人）編『辛酉歳旦』に二句（関十六、九三・一〇三頁）。寛保三年（一七四三）五月刊の翠紅（柳居門の俳人）編『若竹笠』に「イセ　桃渓」として一句（関三、二七〇頁）。延享元年（一七四四）十一月序の至芳・瑞葩・琴吹編の中川宗瑞追悼集『翌のたのむ』に、柳居門の中に一句（関四、一四四頁）。延享二年九月刊の沾耳編『梅日記』に、沾耳の諸国餞別面合の一つとして「伊勢　久居」に一句（関七、二五二頁）。同延享二年四月序の白井鳥酔（柳居門の俳人）編『月次発句』に「勢州　桃渓」として一句（関十三、一二五頁）。延享四年六月序の古川秋瓜（柳居門の俳人）編『俳諧帰る日』に「伊勢連中」として一句、「久居」として一句（関十三、一九〇・二〇一頁）。寛延元年（一七四八）十月刊の秋瓜編『星ななくさ』に三句、内二句はそれぞれ「伊勢連中」、「久居」として載る（関十三、二一〇・二二四・二三九頁）。宝暦二年（一七五二）八月後序、同四年？刊の秋瓜編『鹿島詣』に一句（関十四、三六頁）。

宝暦九年三月跋の仙桂編『鶴の屋どり』は、六味の句や一蜂の口絵、五味貞於の漢詩などが載るとして先述したが、同書に一句（関二十六、一一四頁）。この後に、宝暦十二年正月刊の『李撰文選』がくる。

明和元年（一七六四）末？刊の鳥酔編『はいかゐ　玩世松陰』に「春興　江都」の中に一句（関十、二四五頁）。安永元年（一七七二）十月序の買風（柳居門の俳人）編『茶の花見』に「久居」として一句（関二十七、一四八頁）。以上が、今回俳書に確認できた桃渓の活動である。[24]

桃渓は、十代末から俳諧活動をしていたと思われるが、俳書に確認できたのは元文五年、三十九歳時が最初の例である。遅くともこの頃から明和元年、六十三歳時まで（あるいはさらに後まで）は、参勤交代で一年毎に江戸と久居を行き来しながら俳諧活動を行っていたと見られる。藩務による江戸との往来がいつ頃までかは不明で、晩年は久居で過ごしたと考えられる。その間の宝暦四年、五十三歳の頃から、江戸での勤めの合間に交桜と共に、以則に学んで俳文作りを楽しむようになる。桃渓

の江戸での住まいは向柳原の久居藩上屋敷[25]で、そこを有李堂と称していたが、近隣の柳原在住の以則と交わるようになったのだろう。当時、以則は江戸で詩文・俳文で知られた人であり、一蜂とも交流があった。

以則、桃渓、交桜の作文活動は盛り上がったようで、宝暦八年には、三人で俳文集の刊行を企画するまでに至る。この計画は他者には秘密として進めており、以後の編集作業を通じて、三人の関係性は一層深くなっていたと想像される。桃渓が宝暦九年三月跋の『鶴の屋どり』に句を寄せているのは、この時期の以則との親交に基づくものだろう。以則と交流を深める中で、桃渓はどこかの段階で、以則が序文を書いた一蜂『画本図編』や、続編の『英氏画編』も知っていたものと思われる。しかし、以則の病気で編集作業は滞り、ついに彼が宝暦十年一月に歿してしまう。桃渓は悲しみのうちに、同年から翌十一年にかけて交桜と『李撰文選』を編集し、宝暦十一年八月に桃渓の序文、九月に平砂の跋文が完成している。宝暦八～十一年頃の桃渓の様子を想像すると、以則の病歿を間に挟みながら、文芸活動においては『李撰文選』の編集・刊行を第一義として励んでいたと考えられる。

注目したいのは、宝暦十年一月二十二日に以則が歿した直後、四月二十八日に一蜂も歿していることである。以則亡き後にその遺志を継いで『李撰文選』の出版を目指そうとする時、以則が序文を手掛けた板本である一蜂『画本図編』は、手本となる書籍の一つとしても重要だったはずである。あるいは、桃渓が手元に置いて参照していた可能性もある。そのような中で、以則の知友の一人であった一蜂が以則に次いで亡くなり、桃渓が受けたショックも大きかったことであろう。『画本図編』は江戸の故人達を偲ぶよすがとして、桃渓にとって特別な書になったと思われるのである。

三　曾我蕭白の『画本図編』利用と青木桃渓

ここで注目したいのが、曾我蕭白が宝暦八～十一年（一七五八～六一）頃と明和元年（一七六四）頃（あるいは他の時期にも）、伊勢地方を遊歴していることである。蕭白と久居にまつわる伝承もある。まず、蕭白が十二、三か十四、五歳まで久居の米屋で小僧をしており、その後行方知れずになったが、何年か後に京都で画家になっていたのがわかり、米屋の主人が上京時に訪ねたという逸話がある。[26]蕭白十二～十五歳は、寛保元年～延享元年（一七四一～四四）に当たる。話の真偽は不明だが、蕭白が若年から久居に関わりを持っていた可能性はある。

また、蕭白が久居藩主の命で金屏風を描くことになり、その食客となってしばらく滞在した上、家老に催促されてようやく、家老や家来の前で一線（乾くと虹の絵となった）を描いて立ち去ったという逸話もある。虹図屏風は幕末まで久居藩主の珍蔵だったという。[27]この話の時期は明らかでないが、仮に蕭白が宝暦八～十一年頃に伊勢を訪れた折だとすれば、久居藩士の桃渓は五十七～六十歳で、総締あるいはそれに類する要職にあったと考えられる。逸話の細かい点はともかくとして、虹図屏風が幕末まであったという点は信憑性を感じさせる。久居藩主が蕭白に屏風絵を依頼すること自体は十分あり得、そうした際に桃渓が久居藩家臣として蕭白と関わりを持った可能性はある。

執筆者は先稿[28]で、蕭白が作画に際して一蝶の本画や画譜の図を参照していたことを指摘する中で、彼が『画本図編』を作画に直接利用したことを具体的に示した。同書は蕭白が明和元年頃の伊勢地方での複数の障壁画に利用することから、この時の伊勢旅行に携行したと想定した。また、これら障壁画への図様の利用は、全体構想の一部としてのもので、

作画の便宜のためという側面が強い、とした一方で、『画本図編』も含む一蝶画の、掛幅画等への利用では、特に俳諧的・戯画的な一蝶画をモデルに、一蝶風の作品を制作しているとした。蕭白の伊勢地方での大画面絵画への『画本図編』利用の意義について、蕭白が用いた他の画譜と同様に、原本の筆者などに拘りない便宜的な使用と捉え、より小画面の作品への利用の仕方と分けて考えたのである。しかし、本稿で見てきたような桃渓と以則、『画本図編』との深い関わりを視野に入れるに至り、この意義について、さらには伊勢における蕭白の『画本図編』利用全般の意義について、再検討する余地が生じる。蕭白がまさに伊勢という地で『画本図編』を作画に利用していること自体に、従来見えていなかった積極的な意義があるのではないだろうか。そして、伊勢において、蕭白と『画本図編』を繋ぐものとして、桃渓の存在は極めて重要と思われる。

執筆者はこの度、『続李撰文選』に次の重要な記事を見出した。巻一の「三　七福神ノ辞　桃渓」の中に、「洞津の武子・徐芳子」が「ことしあらたに平安の画工曽我の何某に需めて正三五七九の五節に節季候を摸せしめて六軸となし、猶はた是に好士の賛を乞てこれを家の青氈として賀節の宴に備へんとす。」とある。[29] この文章によると、洞津（津）の武士（津藩士であろう）徐芳は、勤務の暇には俳諧に遊び、伊賀上野出身で芭蕉門の服部土芳の一族である。彼が、京都の画工・曽我の何某に正月～九月の五節と節季候の六幅を描かせ、これに好士に賛をしてもらったものを家宝として賀節の宴に備えようとした。数が六つであるのが嫌なので、桃渓に文辞を添えてもらって七幅としたい、と依頼されたという。この文章が成立した年は不明であり、桃渓が以則に学ぶ中で書かれたものだとすれば宝暦四～九年の間だが、先述したようにもう少し幅を持たせて、宝暦四年以降、同十二年をそれ程下らない時期のものと捉えておく。これは、宝暦八～十一年頃という蕭白の伊勢地方遊歴の時期に重なる。「曽我の何某」は蕭白と見てまず間違いない。蕭白の若い頃の画業を知る新資料として重要であり、かつ、桃渓に蕭白と接点があったことがわかるのである。この記事では間接的な関わりだが、蕭白が伊勢を遊歴する中で、桃渓の周囲の俳諧を好む武士等の注文を受けて作画していたことが知られる。桃渓は一年毎に江戸に行っていたとしても、蕭白の伊勢滞在は長期にわたるので、彼が久居において、俳人として著名であった桃渓本人と面識を得た可能性も十分に考えられる。

宝暦八～十一年頃の桃渓は、先に見たように、以則の病歿を間に挟みつつ『李撰文選』の編集・刊行に注力していた。特に宝暦十年以後は、『画本図編』は桃渓にとり特に大切な書物となっていたと想定した。もちろん、以則や一蜂が歿する前から、伊勢においても江戸の俳友達を偲ぶものとして、桃渓が知友の間で『画本図編』や、あるいは『英氏画編』も鑑賞していたことは十分に考えられる。そうした環境の中に若き画家・蕭白が来たとすれば、注文主側が『画本図編』等を蕭白に示すこともあったであろうし、蕭白が同書を伊勢での作画に活用しようとすることも自然であろう。桃渓自身が蕭白に『画本図編』の使用を示唆したと想像することさえ不可能ではないが、もちろん証拠はない。それよりも、蕭白が伊勢で武家等に出入りするうちに、どこかのタイミングで彼らが『画本図編』を鑑賞していることを知り、鑑賞者の趣味に応える意味で、同書を伊勢での作画に活かすことを考えたと取る方が現段階では自然だろう。蕭白が同書を伊勢で知り、その後上方で入手して伊勢に持参したこともあり得る。蕭白の宝暦八～十一年頃の伊勢における作とわかる作品で、『画本図編』を利用したものは現在の所見出せていない

が、蕭白は明和元年頃の伊勢旅行では各所で同書を活用しているのである。その背景に、桃渓らの活動による、伊勢における『画本図編』受容があった可能性を新たに想定したい。同書は、江戸との関わりが深い伊勢の俳人達により、江戸の俳諧文化の雰囲気を強く感じさせるものとして喜ばれていたと考えられる。

以上のことから、蕭白の伊勢での作品における『画本図編』の図様の利用は、大画面絵画・小画面絵画に拘らず、基本的に一蜂『画本図編』、ひいては一蝶風を想起させることを前提としたものだった、と改めて想定したい。ただし、大画面絵画では、部分的に用いられたそうした図様がむしろ挿話的に一蝶風の要素を呼び込む働きをしており、小画面絵画におけるように作品全体を支配するようにはなっていないと取ることができる。

執筆者は先稿[30]で、蕭白が活動した伊勢や上方・播磨の俳諧文化において、芭蕉と一蝶の繋がりを背景に、一蝶画が珍重されていた可能性を想定した。本稿で取り上げた桃渓が師事した柳居は、美濃派や伊勢派などとの深い関わりを持ちつつ、江戸で芭蕉風の俳諧を広めた俳人である。桃渓の文章等にも芭蕉への意識は強く、伊勢や上方・播磨で、蕉風復興運動の高まりの中で一蝶画が評価されていったこと自体はあり得べきことと考える。しかし、これらの地域には、桃渓がそうであったように、江戸俳壇にいたことがあったり、江戸俳壇と密接な関わりを持ちながら活動していた俳人達が多数いる。特にこうした俳人達の間で、一蝶画や一蜂など英派の画は、一蝶と芭蕉との繋がりもさることながら、より直接的な意味で、江戸俳壇の匂いを強く感じさせてくれるものとして評価されていた可能性が高い。このような見通しの下に、今後、具体的な事例についてさらに詳しい検討を行いたい。

附記

調査に当たり、次のウェブサイトを参照した（五十音順）。註に書く際には煩雑さを避けるため、各サイトの最後に記す略称を用いた。

国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）

新日本古典籍総合データベース（https://kotenseki.nijl.ac.jp/）［新日本古典籍ＤＢ］

東京大学総合図書館所蔵　総合図書館所蔵古典籍（https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/koten/page/home）［東大図ＤＢ］

日本古典籍総合目録データベース（https://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/）

早稲田大学図書館　古典籍総合データベース（https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）［早大図ＤＢ］

註

1　馬渕美帆「英一蜂『画本図編』『英氏画編』の出版事情――板元・大野木市兵衛及び大岡春卜『和漢名画苑』に注目して」（『美術史論叢』三八号、二〇二二年）。『画本図編』及びその続編である『英氏画編』について、詳しくは同論文参照。また、馬渕美帆「曾我蕭白と英一蝶」（『國華』一四七三号、二〇一八年）・同「曾我蕭白による英一蜂『英氏画編』の利用」（『美術史論叢』三五号、二〇一九年）も参照。

2　註1前掲「曾我蕭白と英一蝶」。

3　加藤定彦・外村展子編『関東俳諧叢書』第二十六巻（関東俳諧叢書刊行会、二〇〇四年）一〇八頁。

4　雲英末雄編『江戸書物の世界――雲英文庫を中心にたどる』（笠間書院、二〇一〇年）三四七～八・三九三～四頁。『李撰文選』解説は池澤一郎・

黒川桃子・小財陽平、『続李撰文選』解説は池澤一郎の各氏による。ただし、年齢や地名などに誤りもあるので、本稿に記した内容で指摘・修正に代える。

5　註4前掲『江戸書物の世界』を参照。また、早稲田大学図書館雲英文庫本（請求記号：文庫31 A0351）・同中村俊定文庫本（請求記号：文庫18 00405）・早稲田大学図書館本（請求記号：ヘ05 01182）を調査した（早大図DBを閲覧）。

6　『日本古典文学大辞典』第六巻（岩波書店、一九八五年）。

7　朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目　新訂版』（臨川書店、一九九三年）一三〇頁。

8　註4前掲『江戸書物の世界』を参照。東京大学総合図書館洒竹文庫蔵。同本を調査した（東大図DBを閲覧）。

9　桜井武次郎・藤田真一・清登典子校注『蕪村全集』第八巻（講談社、一九九三年）三一四頁。藤田真一氏による。

また、『猿利口』は石川県立図書館月明文庫本を調査した。石川県立図書館 SHOSHO デジタルコレクション（https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/shosho/digicolle）を閲覧した。

10　清登典子「蕪村と江戸座――京移住後の交渉――」（『連歌俳諧研究』六二号、一九八二年）（同『蕪村俳諧の研究―江戸俳壇からの出発の意味―』和泉書院、二〇〇四年に改訂収録）。

11　浅見美智子編校『几董発句全集』（八木書店、一九九七年）一〇〇頁。

12　『俳文学大辞典』（角川学芸出版、二〇〇八年）。

13　『蕪村全集』第八巻の翻刻によった。なお、「瓜の蔓に～」の句は、天明五年（一七八五）七月奥書の高井几董『新雑談集』には、「ある時野分といふ兼題の会に」の前書と共に嵐山の句として収載されている。註11前掲書、七六頁参照。『新雑談集』は、香川大学中央図書館神原文庫本を調査した（新日本古典籍DBを閲覧）。

14　東京大学総合図書館本（請求記号：A00:6433）を調査した（東大図DBを閲覧）。

15　『李撰文選』巻二の「四　送三六味翁之二三芳野一序　幷仮名詩　桃渓」に、六味は壮年の頃から白髪交じりで他人も自分も「翁」と言っていた、とある。

16　『むかし道』は、跋のある下巻を未調査。

17　山口大学図書館棲息堂文庫本を調査した（新日本古典籍DBを閲覧）。

18　早稲田大学図書館本を調査した（早大図DBを閲覧）。

19　東京大学総合図書館洒竹文庫本を調査した（東大図DBを閲覧）。

20　註1前掲「英一蜂『画本図編』『英氏画編』の出版事情」。

21　岡本勝『近世三重の俳人たち』（おうふう、二〇〇〇年）「青木桃渓のこと」。また、註4前掲『江戸書物の世界』の『李撰文選』解説も参照。

22　浅野松洞『続三重先賢伝』（別所書店、一九三三年）。

23　三重県生活文化部学事課県史編さん室編『県史Q＆A』（三重県生活文化部学事課県史編さん室、一九九八年）「20　津藩と久居藩の職制」。三重県ウェブサイト（https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/rekishi/kenshi/asp/Q_A/detail.asp?record=129）を閲覧した。

24　この他、明和元年十月刊の心水編『玄冬集』（心祇一周忌追善集）に「信州　桃渓」が載るが、別人か（関二十三、二二〇頁）。

25　久居藩藤堂家の上屋敷は、宝暦三年刊『宝暦武鑑』による。国文学研究資料館三井文庫旧蔵資料本（請求記号：MY-1201-111）を調査した（新日本古典籍DBを閲覧）。現在の秋葉原駅の北東に当たる。

26　桃澤如水「曾我蕭白」（『三重県史談会々誌』二巻一一号、一九一一年）の三村秋良による補記。桃澤如水「曾我蕭白」については、山口泰弘「桃澤如水の蕭白画博捜」（『三重大学教育学部研究紀要　自然科学・人文科

学・社会科学・教育科学』六五号、二〇一四年）なども参照。

27　桃澤如水「曾我蕭白（其二）」（『三重県史談会々誌』三巻一号、一九一二年）。

28　註1前掲「曾我蕭白と英一蝶」。

29　註4前掲『江戸書物の世界』の翻刻によった。

30　註1前掲「曾我蕭白と英一蝶」。

本研究はJSPS科研費JP18K00190の助成を受けたものである。